

日本の森林は どうあるべきか!



四手井綱英先生の 講演と座談会の夕べ

昭和62年10月9日
於・札幌市中央区民センター

「日本の森林は

どうあるべきか」

四手井 綱英

ただいまご紹介いただいた四手井です。私が話をすると、「林野庁の悪口が聞けるのではないか」と期待している方もいらっしゃるかもしれませんが、私はただいまのご紹介のように林野庁出身です。だからむやみに林野庁の悪口はいわない。しかし森林や自然を扱う林野行政は基本的には科学技術に基づいた行政を行うべきだ、と私は主張しています。だから政策が先行して科学技術の裏づけのない水源税や人工林の異常な増大、短伐期林業などには批判的です。

〈北海道の森林〉

私は昭和十年代からときどき北海道の森林を見せられてきました。今はちがうが昔の森林は薪炭としての伐採が多かった。本州では薪炭採取用の萌芽(ぼうが)で更新する低材による林業が安定して続いていたが、北海道ではそれがなく、豊かな森林からミズナラやイタヤの大木が伐採され薪炭になった。今にして思えばもったいない話です。北海道の木は通直なものが多い。そのためヨーロッパの広葉樹林に似ている。ヨーロッパのブナ林なども真つすぐ上に良く伸びている。これは北国では夏の日長と高緯度の斜光が樹木に良い影響を与えているのではないかと

と思います。だから北海道のミズナラはオーク材としてヨーロッパに随分輸出され、カン桶などに珍重されました。それに比べると本州の木は曲りくねっていてかたく加工しにくいのが欠点です。

しかし用材林の造林になると本州の方がスギ、ヒノキなど歴史と伝統があり、北海道の造林はまだ日が浅い。ヨーロッパトウヒやオウシユウアカマツなどを試験的に造林したり、いろいろ苦労してエゾマツ、トドマツの育苗ができるようになったのは昭和の初めの頃だと思ふ。戦後は成長の早いカラマツが大造林され、先枯病の大被害が出る失敗もありました。

〈短所の多い人工林〉

造林はなかなか思うような好成绩にならない所が多くあります。不成績造林地は帳簿から消されて統計に現れにくい。北海道のトドマツ造林地も成功したのは五〇%くらいではないかと思っています。ですから私は人工造林は否定しないが、年間に八〜一〇m²/haくらいの成長が見込める環境条件のよい立地だけで造林し、あとは天然林施業をやった方が良く、と思います。もちろん木材資源の需給のことは無視できないが、造林木はなるべく長伐期にすべきです。

ドイツでは皆伐人工造林は悪いことだとされていません。人工造林地は短所が多いのです。森林の多目的利用ができない。人工林では大型動物が生息できない。動物の食料は広葉樹林の方が豊かです。日本の人工林は森林面積の四〇%くらいになっているがこれは過大で三〇%以下に縮小し、あとは天然林施業にした方が良く、と思います。吉野では八〇%以上も人工林にしているが、立地上伐るべきでないところまで人工林になっている。隣接地が天然林だとウサギやネズミの生息地となり、人工林に被害が及ぶからといって人工林にしまっています。しかし中腹以上は不良林です。

人工林は二代、三代続くと地力が低下して生産力が衰えてきます。ドイツでは林業の目的は木材生産の比率が低くなり、環境としての森林、多目的利用の森林が重視されています。林野庁でも最近はその気運が高まりつつあります。でも日本の林業はまだ気が短かすぎる。何か実験結果が出ると、すぐ実地に応用してしまふ。中間的な試験施業を経た上で実地に応用すべきです。短期で安上りだけを考えたのでは本当の林業はできません。天然林だつて綿密な集約の手入れが必要なのです。「後は野となれ山となれ」では本当の「山」にはならない。

〈日本人の森林観〉

この頃は自然保護に対する世論が高まってきて、伐る林業だけでなく、国民の望む方向に森林施業をせよ、という声も聞かれます。私も原則はその通りだと思いますが、しかし現状では不安もあります。日本の国民は本当に森林のことを良く知っているでしょうか。まだドイツ国民には及ばない。数年前に私達は日本とヨーロッパで森林意識の国際比較をやった。「森林をみる心」(「森林と文化」国際シンポジウムからの報告) (四手井綱英、林 知己夫編著、共立出版) という本に纏めてあります。

日本では森林の中に入りこんでレクリエーションをやる人が少く、外から眺めている人が多い。ところがドイツ人は森林の中へ入り込んで楽しんでゐる。ゲーテの作品の中にも、森の中を恋人と散歩する光景が出てくる。それはヨーロッパの森林は下草

が少なく、日本はササや下草が多い、ということも原因しているが、それが森林の知識にも反映しています。

日本では森林樹種名を五ツあげよ、という問いに対して五ツ答えられた人は半分もいない。森林には生えてない庭木のウメなどという答が出てくる。森林は人手を加えないで自然にまかした方が良く、と答えた人に、天然林と人工林の写真を見せると、人工林の方が良いという。頭の中の観念と森林の実際の知識がくいちがっている人が多いのです。もともと森林の実態を知ってもらうために、市民レベルの教育、啓蒙が必要だと思います。

〈これからの森林保護〉

自然保護運動は最初は原始林保護運動から始まりました。しかし今の日本には厳密な意味での原始林はもはや存在しない。もちろん、それだけに手厚く保護する必要があるが、注意を要するのは原生林に近い森林は必ずしも優れているとは限らないということがあることです。原生林は安定したものと信じている人が多いようだが、台風や病虫害などで穴があき、常に盛衰をくり返している。したがって、原生的な森林を保護するには、あちこちの穴が次々と更新していけるだけの十分に広い面積が必要です。狭い保護地区はダメです。広い保護地区を設定するには北海道は恵まれた条件にあります。

ところで原生林に関心が集まっているせいか、二次林はほとんど保護対象になっていない。これから都会人のアメニティ、レクリエーションを対象として、二次林の保全もいっそう大切になってきます。日本の多くの二次林は薪炭生産など長いあいだ農山村の人々の暮しの中で成立、維持されてきた。それ

はただ人手を加えないで放置するのではなく、適切に伐りながら低林の状態を維持してきた。これからはシイタケの生産とか昔の木地師のように色々な木工をやり必要程度の収入を得ながら、保全していくことができるはずですが。しかし人工林ではそれがやりにくい。二次林の身近な自然をどう保護するかということも、これからの課題です。

ご清聴ありがとうございました。

第一部 座談会

「北海道の自然を巡って」

■ 出席者 ■

四手井綱英（京都大学名誉教授）

八木 健三（北大名誉教授・当協会会長）

紺谷 友昭（北海道社会保険看護専門学校講師
当協会常務理事）

鮫島惇一郎（自然環境研究室主宰・当協合理事）

高畑 滋（農林水産省林業試験場北海道
道支場宮農林牧野研究室長）

司会

儀 浩三（専修大学北海道短期大学教授
当協会常務理事）

司会 ただいまから座談会に移らせていただきます。十分な時間はありませんが、四手井先生のお話を中心に、会場の方からのご質問と、北海道自然保護協会の関係者の話をおりませながら進めたいと思います。まず出席者の方から簡単な自己紹介を。

鮫島 自然環境研究室を主宰しています。今は山

岳道路と森林の変化に関心を持っています。

高畑 林業試験場で森林の多目的利用の研究をしています。先ほどのお話の二次林の新しい利用や、リゾート開発と森林のあり方に関心をもっています。

八木 岩石学を専門としていますが、北海道自然保護協会の活動を通じて森林のことも考えるようになりました。国立公園の中の森林は経済優先でなく何とか自然保護重視でやってほしいと念願しています。

紺谷 哲学、経済の方から自然保護のあり方を勉強しています。都市近郊の私有林をどう守るかに関心があります。「神々の遊ぶ庭」の中でも「荒廃する私有林」などを担当しました。

司会 会場の方から、先ほどの四手井先生のお話に関して質問をいただいています。

① 森林意識の国際比較アンケートで、人工林と天然林の写真を見せる方法は、天然林の良さ（肥沃な土壌、フイトンチッド、野鳥の声など）が伝わらないのではないかと。

② アメリカでは森林施業にもアセスメントを導入しているというが、日本でその制度を導入することの可否について。以上の二つは質問者の名前が記されていません。

③ 太田さんから、日本では官営でも民営でも林業は経済的に成立しないのではないかと。

④ 神谷さんから、いくら植林しても酸性雨が降れば育たない懸念がある。酸性雨対策はどうしたらよいか。

以上が四人の方の質問です。それに出席者の発言もふまえ、四手井先生のお考えの一端を伺わせていただければと思います。

四手井 まず①、意識調査の写真の問題、ご指摘

のように写真では天然林の良さは伝えにくい。しかし簡便な方法としてはこれしかない。同じ写真を日本人にもドイツ人にも見せ、それで出てくる答が違ってくるのだから、それなりに意味はあると考えています。

②、林業へのアセスメント導入ですが、林業に限らず、現在のアセスメントで疑問なのは、アセスメントの結果、事業を否定する答が出てきた例がない。また「影響がない」といつても、どの範囲、どのレベルでの影響か不明なことが多い。例えば気候に影響がない、といつても大気候なら山を一つそっくり削つても影響がないが、ミクロに考えたら、ちよつとした地形の変化でも風や日照に影響がある。そのような実態のアセスメントなら導入してもあまり意味がないでしょう。

③、林業は長い目で見ないと。今の経済実態からだけからでは、たしかに苦しい。しかし林業は木材だけの価値でなく、別な価値観を導入して検討すべき問題だと思います。

④、それから最後に酸性雨。ヨーロッパではご承知のように酸性雨が大きな問題になっている。この前も国際会議でドイツ人に会つたので聞いたが、たしかにどんどん枯れているけれど、その因果関係はまだ十分に分らないという。これからの大きな課題でしょう。ただ日本はヨーロッパより酸性土壌がもともと多いから、それほど深刻ではないかもしれない。いづれにしても、その原因究明と対策の確立は今後の問題です。

司会 ありがとうございます。だんだん時間がなくなってきましたが、前段の出席者発言に関連して、森林と観光、リゾート開発の関係について、いかがでしょうか。

四手井 それは大問題です。日本人はとにかく観光地のマナーが悪い。どこへでもゴミを捨てる。でも観光企業はゴミの後始末までは責任を負わない。それに観光施設のデザインも悪い。失礼ながら、今度、国立公園になった釧路湿原の立派な展望台も、建築家の自己主張が強すぎて周囲の風景とは、まったく調和していない。あれは釧路市役所の施設だというが、役所でさえそうだから、民間にまかせたらどうなるか分らない。観光開発はよほど慎重でなければならぬし、日本人の自然保護心とよいセンスの啓発がまず必要でしょう。

司会 たいがい会場から再質問がありました。酸性雨についてまだ不明のことが多いというが、中国などの工業化が進むと日本は被害者になることが心配される。日本の酸性雨研究の現状はどうか、という質問です。

高畑 専門外でよく分らないが、林業試験場でもほとんど手がけていないと思います。

八木 この間ヨーロッパへ行つた時、北欧なんかではヨーロッパの他の工業国からの被害を受け、森林が枯れる他に湖水が酸性化して死の湖になる深刻な問題があるのを目のあたりにしてきました。中国の工業化はたしかに日本にとって心配なことです。

司会 話が肝心なところに入ってきましたが、残念ながら時間がなくなってきました。最後に八木先生、まとめを兼ねてどうぞ。

八木 四手井先生の自然保護教育の必要性について同感です。インドはマナーの悪い点もあるが、物を大切にすから捨てるものはない。日本は物質的に恵まれすぎてゴミが多い。空カンなどもデポジット制を早く導入すべきだ。それに自然の大切さを十分に理解しない人が多い。先週は青森の八甲田山へ

行ってきたが、今あそこで大きなロープウェイ計画が問題となっている。あんな高山帯まで大勢の人を輸送したら、せつかくの自然がすぐ荒らされてしまう。やはり一人でも多くの人に自然保護心を育てなければならぬ。

今日は限られた時間の中で十分に討議できなかったが、四手井先生は「日本の森林はいかにあるべきか」の大きなテーマについて、惜しみない知識を与えてくださった。皆さんも今日の話をきっかけにして、それぞれの考えを深めていただきたいと思います。

ありがとうございます。
司会 どうも今日は皆さんご熱心にありがとうございます。ありがとうございました。



M. S